
辺見作二郎探偵事件簿 1

滝龍太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

辺見作二郎探偵事件簿 1

【Nコード】

N9489I

【作者名】

滝龍太郎

【あらすじ】

辺見作二郎探偵事務所に、女性の依頼人が見えた。

夫が半年前に交通事故に遭って死亡し、三千万円の保険金が降り、その直後から妹夫婦が何かと世話を焼き始めるが、依頼人の頑固な態度から、身の危険にさらされる事が起き、辺見に依頼をしに来たのである。

そしてイブの夜、依頼人の家から火の手が上がった。

辺見作二郎は警視庁で長年刑事を勤め、独特の勘と頭脳で難事件を数多く解決して来た。が、ある時、同僚の刑事が目の前でピストルで撃たれ、殉職したのを契機に警察を辞め、自ら探偵事務所を設立したのである。

人情にもろく、庶民の味方として街の人気者で、気取りのない好紳士である。

その辺見作二郎探偵事務所が池袋西口の小さな雑居ビルの二階に移ったのは、暮も押し迫った十二月の二十二日のことであった。駅から一分という立地の良さで、狭く汚い雑居ビルの二階であるが破格の家賃で借りることができたので、契約と同時に暮れの忙しい中を一拳に引越して来たのである。

一拳にといっても探偵事務所なのでそう荷物はなく、机が三つとロッカー、それに大きめの書庫と薄汚い応接セットが一组という、小さなトラックに充分積める程度であった。

ただ、何件かの難事件を抱えての引越しなので、頭の中の整理と顧客との連絡の中での引越しのため、一拳でという形容が当てはまっただけである。

事務所の窓ガラスに、外から見えるように辺見探偵事務所と紙を貼っただけの事務所であるが、依頼主の多くは辺見の友人から口伝てで来るのが殆どである。そのおかげで、目立つ場所でなくとも、交通の便が良い場所であればどこでも良かったのである。

机などの配置もすぐに終わり、助手の大野と事務雑用の佐伯美子は、やりかけの仕事に取り組む事ができた。

「先生」

辺見作二郎のことを先生と呼んでいる。

「そろそろ吉野智子の甥の市村勝治に接触してみましようか？」

助手の大野が、吉野智子と書かれた依頼人のファイルを開けて聞いた。

「そうだな、いい頃かも知れんな」

辺見はそう言ってコンピュータのキーを叩いた。

画面に吉野智子のデータや、今までのやり取り等が細かに載っていた。その中で特に重要と思われるところには線が引かれていた。これは佐伯美子が二人の調査結果を元に克明に記録したものである。その中に市村勝治に関するデータも入っており、辺見はそれ呼び出した。

依頼人である吉野智子の夫が半年前に交通事故に遭い死亡した。保険金は三千万円である。その保険金を貰った直後から、妹夫婦が何かと世話を焼き始めた。

妹の夫、市村勝太郎は練馬で不動産業をやっており、不景気のためか経営は思うにまかせず、保険金の三千万円を目当てに色々世話を焼いているようである。

吉野智子には子供がいないので、妹夫婦の恰好の餌食にされそうになっていた。だが、智子の頑固たる態度を見て妹夫婦は手を引いたが、今度は身の危険にさらされることが何度か起きた。

そこで、警察に言ってもただ見回りを強化するとしか言ってもらえず、知人を通して辺見の事務所依頼したのである。

その後も二度ほど危険な目に遭ったのだが、その一つに、妹の子供である市村勝治に似た人物を智子は目撃しているのである。

智子は夫の死後、残してくれた家と三千万円のお金で不自由はないが、食べていかなくはないけないのと、淋しさもあってスーパーに働きに出たのが一ヶ月前。その帰りに、家のそばまで来た時、後ろから猛スピードで智子めがけて来た車があった。

智子は以前にもそういうことがあったので咄嗟に電柱の陰に入っ

て難を逃れたが、その時薄暗い中にもチラッと運転手の横顔が見え

た。妹の子供の勝治に似ていたのである。

親が駄目なら子供を使えばかりに、妹夫婦の執拗な策略に遭っている智子である。

妹夫婦の真相はどうか時間を掛けて調査をして来たが、智子の思うことが当たっていると辺見は判断してきている。

市村勝治の人間性、友人等も調査した結果、凶暴な性格は親譲りで高校を二年で退学させられ、十九歳の今まで定職を持たず、好き放題に遊んで暮らしていた。当然、金には不自由し、町のチンピラ仲間に入り悪行も一つや二つのことではなかった。父親の経営する会社にもかなりの損害を及ぼしているのは当然の成り行きだった。

妹夫婦はそんな息子の勝治を使って、姉の智子を殺そうと企てたのかも知れない。

2

街はクリスマス一色である。

探偵という仕事はクリスマスも正月もなく、ただ依頼人の注文に従いその経緯を報告し、依頼人の満足するまで調査をして終結するのである。事件かどうか分からないものを執拗に追い求め、終わるまでは休みというものはないのである。

大野は市村勝治のたまり場としてある場末のスナックへ行った。

扉を開けると、入口の横に大きなクリスマスツリーが飾られ、店の女の子たちは皆頭に三角の帽子をかぶっている。客は四、五人ほど入っており、きゃあきゃあ賑わいをみせていた。

いらっしやいませと女の子の言う声はかき消され、大野はカウンターの椅子に腰掛けた。カウンターにはだれも客は居ず、バーテンが注文を聞いてきた。大野は水割りをダブルでと言い、きゃあきゃあ騒いでいる方に目をやった。

（市村は居ないな）

街で二度ほど尾行をしたことのある相手なので、顔はスナック

の薄暗い中でも判断できた。

大野はゆつくりと顔を戻して水割りに手を掛けようとした時、このママさんらしい人が隣にやって来た。

「いらっしやいませ。お一人？」

愛想笑いを浮かべて大野の顔を伺った。

大野はこのママであることを聞き、

「人を探してるんだが」

と、大野はすぐさま切り出した。

「市村勝治という男だが・・・」

市村の名前を出した途端、ママの顔色が変わった。

「あんた刑事さん？」

「いや、知り合いの者だが」

大野は言葉を濁した。

「刑事に見えるけど・・・」

「そんなことはない。そんな屈強な男に見えるかい？」

大野は手を広げておおげさに言った。

「分からないわ」

ママは大野の顔をまじまじと見た。

「刑事だと都合が悪いのかい？」

「そんなことはないけど」

と言って、ママはバーテンに水割りを注文した。

「何かやばいことをやってるのかね？」

大野がさりげなく聞いた。

「そんなことはないわよ」

ママはそう言うと、水割りを口につけた。

「色々知ってそうだけど、ここにはよく来るのかね？」

「たまにね」

ママはあまり喋りたくなさそうである。

（この女は何かを知っている。勝治とはどういう繋がりがあるのだから）

「勝治の彼女がここで働いていると聞いたのだが、どの子かな？」

大野は当てずっぽうなことを言って、ボックスできゃあきゃあ騒いでいる女の子たちを見た。

「勝っちゃうの彼女なんかここには居ないわ」

ママがきつい顔をして大野を見た。

「ほう、じゃどこに居るんだい？」

「知らないわ、そんなこと」

「でも確かにここで働いているって聞いたんだが」

大野が食い下がった。

「うちの子の中には居ないわ。きっとどこかのスナックと間違えるんじゃないの」

ママが強い口調で否定した。

大野はこれ以上聞いてみたところで何も出ないと思った。

「ちよつとトイレ」

椅子から立ち上がり、大野は奥のトイレに行った。入るふりをし、戸を少し開け、ママの動きを探ってみた。案の定すぐに椅子から降りてボックス席の方に行った。ただ狭い隙間から見ているので、だれのところへ行ったのか大きく開けてみないと分からない。

頃合いを計って大野はトイレから出て、カウンターの椅子に戻った。ママは何食わぬ顔で元居た場所で水割りを飲んでいた。

（素知らぬ顔をしたってお見通しき。店のだれかに耳打ちして、今日は来るなって電話するように言ったに違いない）

大野は水割りをおかわりした。そして、ボックス席の方をチラッと見た。四人居た女の子の内、一人が居ないのを見て見ぬ振りをして、話題を変えて言った。

「今年是不景気だから、お客の足は鈍いでしょう？」

「ええ、団体さんがめつきり減りましたわ」

「早く景気が良くなつて貰いたいもんだ」

大野はぶつぶつと言いながら水割りを口にした。

（ママに言われて外に電話をしに行ったのが、きつと勝治の彼女だ

ろっ)

大野は当たり障りのない話をして、時間を引き延ばした。市村勝治の彼女と思われる女が帰って来るまでは帰れない。

夜が更けるにつれ、店は混んで来た。あと一つのボックス席も埋まり、六人ほど座れるカウンターも、空いた椅子が一つになって来た。

先程の女はまだ帰って来ない。電話をしに行っただけならとつくに帰って来てもいいわけなのだが、かれこれ一時間は経つ。勝治のねぐらまで行っただけかも知れない。

ごった返してる店の中を見れば、一人でも女の子が居なければ大変なことなのである。招かざる客の大野としては早く帰ってあげたいが、せめてその女の正体を掴まなければ帰るに帰れない。

(俺が居る間は帰って来ないのかも知れない。ママがそう指図したのかも)

大野は、ママがトイレに行った隙をみて、店の女の子にもう一人の子は? と聞いてみた。

「ユミちゃん?」

「ユミちゃんって言うの? さっき出て行った子」

「ええ、そうよ。忙しいのに、ママの用で行ったきりだわ」

その子はマリちゃんと言い、忙しいのにユミちゃんが居ないのでイライラしていた。

大野はここぞとばかりに勝治のことを聞いてみた。

「ああ、ユミちゃんの彼ね。しばらく来てないわ」

「どこに住んでるのか、知ってるかね?」

大野が聞くと、不審な顔をしてマリちゃんが聞いてきた。

「お客さん、刑事さん?」

「いや、勝治君のお父さんの友達なんだ」

「そう」

と言ってマリちゃんは疑いもせず教えてくれた。

「店を出て左に少し行くと国道にぶつかるわ。それを渡って一本目

の十字路を右に行くと、左側にさつき荘っていうアパートがあるから。その二階の一番手前の部屋」

「詳しいね」

「ええ」

どうしてって聞こうとした時、ママがトイレから出て来たので大野は急いで席に戻った。

（一緒に行ったことがあるのだろう。ユミちゃんとは仲良しなのかも知れない）

勝治のねぐらが分かったので、招かざる客は退散してやらなければと大野は腰を上げた。

ママの鋭い視線を浴びて大野は店を出た。

3

吉野智子の妹、市村道子の素行を調べていた辺見は、夫の勝太郎に知られてはまずいことを知り得てしまった。

道子の通うスポーツクラブの講師と深い関係になっていて、今まさに二人はラブホテルに入って行ったのである。

辺見は、二人がラブホテルに入る瞬間の写真を撮ることができた。夫の経営する市村不動産は倒産寸前だというのに、妻の道子は若い男と浮気をしている。息子はどうしようもない街のダニになっているので、市村家は目茶苦茶である。

市村不動産の経営難は不景気だけが原因ではなく、社長の市村勝太郎はろくに仕事をせず昼間から麻雀ばかりやっていて、いつ崩壊してもおかしくなかった。こういう要因が犯罪の引き金となることは多々あるので、姉の吉野智子の心配事は当然のことである。

事務所に戻った辺見は、早速暗室に入り道子の情事の写真を現像した。既に午後十時を過ぎていた。狭いながらも厨房兼の暗室が兼ね備えてあり、辺見自らプリントまでの作業をやるのである。

引越す前の街では、名探偵ともてはやされ街の人気者になって

いた。引越して来たこの池袋でも名探偵ぶりを見て貰い、街の人氣者になりたいと辺見は思っている。ただあまりにも前の街とは違つて大きな街なので、そこそいければ良いと思つてゐる。そんな引越した早々、暗室の恩恵になるとは思つてもみなかつた。

三十代くらいの人物と、肩を寄り添つてラヴホテルに入る道子の顔がはつきりと写つてゐる。その何枚かの写真を手に、辺見は暗室を出た。

「おお、帰つてたのか」

「ええ、使用中の札が掛かつてたものですから」

暗室といつても實際は厨房なのだが、暗室として使つてゐる時はカーテンが引かれ、使用中の札を掛けるようになってゐる。

大野は辺見が暗室から出て来るのを待ちながら、勝治の女のことを黒板に書いていた。

「勝治の女はユミというのか」

辺見が黒板を見て言つた。

「スナックで働いてゐる子ですが、今日は会えませんでした」

大野はスナックでの出来事を辺見に話した。ママの大野に対する態度、同じスナックに居たマリちゃんから聞いたこと。そして、そのマリちゃんから聞いた勝治のめぐらへ行つたが、だれも居る様子はなく、会えずじまいだったことなどを詳しく話した。

「そうか、大野君を刑事と間違えたんだな。その目付きじゃしかたないな」

ハハハと辺見が笑つた。

「そんなにきつい目をしてますかね」

大野は鏡を見て、目を細めたり見開いたりした。

「どちらにしろ、探偵の目なんだから、同じようなもんじゃないか」
「そうですね」

ハハハと大野も笑つた。

「勝治の居所が分かつただけでも良かった。転々と渡り歩いてると思つが、そのスナックに勤めてゐる女の部屋なら、当分そこに居る

に違いない。ただ大野君を刑事と間違えているのならまたどこかへ行くかも知れんが、そのユミという女は簡単には他へ行かんだろう」

「あのスナックに居ますかね？」

「ああ。たとえ居なくなつたとしても直に戻つて来ると思うよ。ママがそれほど勝治に気を遣つていてそのユミという子を自由にさせているのなら、ユミという子はママに恩があるわけだ。それを勝手に、とんずらはないだろう」

「そうですね」

大野は納得した。

「引き続き勝治を追つてくれ。それとねぐらを教えてくれたマリという子とも接触して貰いたい。仲が良さそうで、実際は違つかも知れん。そうなると色々なことが聞き出せると思う」

辺見は女心を知りつくしているので、ユミとマリとの関係が微妙な間柄であると察知した。

「分かりました」

大野が頷いた。

「ところでその写真は何ですか？」

「良く見てみな」

辺見はキャビネット大にプリントした何枚かの写真を大野に渡した。

「これは市村道子じゃないですか！ 若い男と……。しかもラヴホテルに入るところじゃないですか！」

大野がびつくりした。

「ぴったりくつついて堂々として行つた。全く、どういう神経をしているのかね」

辺見が投げやりに言った。

「相手の男は例のスポーツジムの先生ですか？」

「察しがいいな、その通りだ。スポーツジムだなんて言つて、男漁りに行つてたのかも知れん」

「呆れたもんですね」

大野は、子が子なら親も親だと思った。

4

翌日、昼過ぎに大野はユミのアパートを訪ねたが、帰って来てる様子はなかった。そこで大野はスナックを張ることにした。当然スナックはまだ開いてなく、大野はスナックの斜め前にある喫茶店に入りスナックの入口が見渡せる窓際に座った。

大野はコーヒーを注文し、雑誌を見る振りをしてスナックの様子を伺った。

（こんな時間に来るわけないな）

と思いながら見ていると、内側からそろりとスナックの扉が開いた。そこから女の子が顔を覗かせ、辺りをキョロキョロ見回して出て来た。そして、その後ろから皮のジャンバーを着て、サンングラスを掛けた男が出て来た。

（勝治だ！）

大野は、二人の行方を見て喫茶店を出た。

二人は辺りをキョロキョロしながら、アパートの方へ向かって行った。

大野は電柱の陰に隠れながら二人の後を追った。

刑事らしい人が訪ねて来ると逃げたり、辺りをキョロキョロしてこそこそしているところを見ると、やはり悪いことをしてるのだろう。臍に幾つもの傷を持つ人間なら、何もなくても拘わり合いにはなりたくないのかも知れない。大野の稼業としてはそれは良く分かっている。

二人は国道を渡り、少し行っただころの煙草屋で勝治は止まり、ユミとおぼしき女が先に向かった。

そして、勝治は電話を掛け、何回か頷くと受話器を置いてアパートに向かった。

おそらく、ユミを先にアパートに行かせ、何か変わりがないか様

子を見させたに違いない。変わったことがあれば、勝治はアパートへ行かないで他へ行くのだろう。

大野は電柱の陰からそんなことを考え、勝治の用心深さを知った。

大野はアパートの階下にやって来て二階を見上げた。

（簡単には会って貰えないだろう）

そう思いながら階段を上がり、ユミの部屋のチャイムを押した。ピンポン。

しばらく様子をみたが、何の応答もない。忍び足で玄関に来てドアスコップを覗いているに違いない。

大野はそんなことにはお構いなしにチャイムを鳴らし続けた。
（やはり居留守を決め込んでるな）

大野は玄関の戸を叩いた。

「ユミさん……。ユミさん」

大野はユミの名前を呼んだ。

「ママから頼まれたんだが……」

大野は嘘を言った。

勝治に用があると言えば開けないに決まっているので、ユミに用があるように言った。

ドンドン。

大野はさらに玄関の戸を叩いた。

しばらくして、カチャリと鍵の外れる音がして戸が開いた。

「なあに？」

やつれた顔をした、若い女が顔を出した。

「ユミさんですね？」

大野が優しい言葉で言った。

「ええ」

ユミがコクリと頷いた。

「ママから言付けがあるので聞いて貰いたい」

と言っや否や、大野はするりと玄関の中に入った。

ユミは制止する間もなく、ちょっと待ってと言って上がり框で両手を広げた。

大野は玄関に脱いである男物の靴に視線を落とした。

「何なの？」

ユミはいぶかしがっている。

「実は、市村勝治さんに殺人の容疑が掛かっていてどういうことなのか、あなたに聞きたくて来たのです」

大野は口から出まかせを言った。

ユミは驚いた表情もせず、

「あなたはだれなんです？」

と、大野に聞いた。

「ママの顧問税理士です。店の女の子について、ママは何でも私に相談します。今回のことも相談されまして、どうしたらいいのかわか大変悩んでいます。そこで出過ぎた真似かも知れませんが、私があなたから聞こうと思ひまして」

ユミはふーんといった顔をして、

「勝っちゃんは何もしてないわ」

と言った。

「何も？」

「ええ。そりゃ前には色々あったかも知れないけど、今は真面目にやってるわ。殺人容疑なんてのは何かの間違いだわ」

ユミはそう言って大野を睨んだ。しかし、ユミの表情からは、何らかの後ろめたいことをしているということが読み取れた。

「じゃ、刑事が聞き回っているということは違うことなんだね」

「だと思っわ」

「それならいいんだ……。あまりママに心配かけさせないほうがいいよ。もう歳だからね」

「ええ」

ユミがクスツと笑った。

笑い顔は、あどけない少女の顔だった。

「一度、勝治君を紹介してくれないか」

「ええ」

ユミが戸惑った顔をした。

大野はそれ以上突っ込まなかった。ここはさりと帰った方がいいと思ったからである。

「じゃ、ママには心配しなくてもいいからと言っておくよ。あ、それと、今日私が来たことはママに内緒だからね。すぐ余計な心配をする人だから、分かったね」

「はい」

ユミは大野のことを、完全にママの顧問税理士だと信じている。

「それから、ユミさんの電話番号を聞いておくかな。また伺うことがあるかも知れないので。その時は電話して来るから。今日みたいにドアをドンドン叩かないですむからね」

大野が笑って言った。

ユミは照れ笑いをして、すみませんと言い、素直に電話番号を教えた。

その頃、辺見は道子の通うスポーツジムに行き、

「うちの女房が来たいというのでパンフレットを貰いたいのだが」

と、受付の女の子に言った。受付嬢はパンフレットを渡しながら、色々と説明してくれた。

辺見はパラパラとパンフレットを捲りながら説明を聞いていた。

何枚か捲ると、先生が生徒に指導している写真があった。その中に、例の道子と一緒にラヴホテルに行った先生が、生徒を指導している場面があった。

「この先生はどこかで見たことがあるのですが、名前は何と言うのですか？」

辺見がさりげなく聞いた。

「はい。岸田先生です」

受付嬢は何の疑いもなく、にこやかに答えた。

「テレビに出たことはないですか？」

「さあ、どうかしら」

「いや、人違いかな」

ハハハと辺見が笑った。

受付嬢もさわやかな笑いをし、辺見は後ろ髪を引かれる思いでジムを後にした。

5

明日はクリスマスイブ。

道子と岸田は、明日必ず会うだろうから、何としても今日のうちに岸田と接触しなくてはと、辺見は策略を練った。

「もしもし」

「。。。スポーツジムです」

先ほどの、さわやかな受付嬢が出た。

辺見は声を変えて言った。

「岸田先生をお願いします」

「はい。少々お待ち下さい」

午後三時少し前、休憩時間と思いその時間に電話を掛けてみた。しばらくして、

「岸田です」

と、はつきりした声で言った。

「実は……。市村道子さんのことで話があるのですが」

辺見がもの静かに言った。

岸田は一瞬ドキリとしたのか、沈黙の後、

「どういうことでしょうか？」

と、小さな声で聞いて来た。

「私は市村道子さんのご主人の友人で浅川と言います。あなたと道子さんと、何か関係があるのじゃないかとご主人は勘ぐっているのですが。事実をお聞きしたいと思ひまして」

「……」

岸田は一拍おいて、

「私と市村さんとは先生と生徒の関係でして、ご主人が何か勘ぐっているのだしたら、それは誤解です」

岸田が迷惑そうに言った。

「誤解されるようなことは？」

「そんなことはありません」

岸田はあくまでも否定した。

「そうですか……。でもご主人は証拠を握っていると言っていましたか」

「何をですか？」

岸田の声が小さくなった。受話器の向こうでは、ザワザワと人の声が聞こえている。

「電話では何ですので、お会いしてゆっくりと話したいのですが」

辺見が誘導した。

「ええ」

岸田が小さく頷いた。

「早いほうがいい。今からどうですか？　ちょっと抜け出せませんか？」

と言って、辺見はジムの近くの喫茶店に誘った。その店はジムのある表通りから一本入った小さな喫茶店だった。

辺見が喫茶店に入ると、岸田は急いで来たらしく一番奥のボックスにもう来ていた。

辺見はゆっくりとした足取りで岸田に近づいて行った。そして、

軽く会釈をして岸田の前に腰掛けた。

「先ほど電話した浅川です」

辺見は岸田の目を見て言った。いかにも、あなたのことは何でも知っているという表情で見たので、岸田は一瞬ビクついてしまった。
「一体私が何を……」

辺見の鋭い目を見ていられず、岸田は伏し目がちに言った。

「市村さんは全てを知っています」

辺見は、そんな岸田に追い打ちをかけた。

岸田が一瞬顔を上げた。

「あなたと道子さんができていることをです」

「何を言っんです」

その時、ウェイトレスがコーヒーを運んで来た。その間、岸田はワナワナと唇が震えていた。

「市村さんは、今回のことは目を瞑るから、何を考えているのか教えてほしいと言ってます」

「……」

岸田は沈黙している。

「市村さんはこうまでおっしゃっているのだから、素直に従ったほうがいいですよ」

辺見が岸田を睨んだ。

岸田は沈黙したままだ。

「まだしらを切るのですね。それではこれを見せましょう」

と言って、辺見は背広の内ポケットから、例のラブホテルの前での写真を取り出した。

「えっ！」

岸田はそれを見るなり顔色が変わった。

「これは！」

写真を手に取り、食い入るように見ている。

「これで分かりましたね。何もかも包み隠さず喋ってくださいね」

岸田は頭をコクリとした。

「先ほども言いましたように、市村さんはこの事に関して非常に寛大です。しかし、このまま長引くようだったら何らかの手を打つが、二度とこのようなことがなければあっさりと水に流すと言っています。ただ、知恵者の女房のこと、何か企んでいるならきつとあなたが言ってるでしょうから、それを聞いて来てくれと頼まれたのです」

岸田は黙ったまま、何度も頷いている。

「どうですか？」

辺見が岸田の顔を覗き込んで聞いた。

「はい」

岸田はすぐる目付きで辺見を見た。

「正直に言いますから、見逃して下さい。お願いします」

岸田が頭を下げて来た。

「悪いようにはしないから。大丈夫だ」

辺見が岸田を慰めた。

それを聞いて、岸田は恐る恐る話し始めた。

「近々大金が入るから、二人でどこかへ行こうと奥さんが言っていました」

やっぱり、と辺見は思った。

「いつ頃入ると？」

「正月までには入るからと言ってました」

「そうですか。その話はいつ頃のことですか？」

「今月の初め頃です」

姉の智子を殺すなりして三千万円を巻き上げようとしているのは、やはり事実なのだろう。色々とつじつまが合って来た。

「金額は言っていましたか？」

「いや、ただ大金とだけしか聞いてません」

「その金が入ったら、具体的にどこへ行くと行ってました？」

「具体的には何も言ってません。ただ、どこか知らない町で暮らしたいと言っていました」

道子の性格が表れている。いい加減に人生を歩むことのできる人なのだ。

「あなたはその言葉に不審を持たなかったのですか？」

「そりや持ちましたけど、あの人のご主人は不動産屋をやっていて、羽振りがいいと言っていましたから。何か大きな取引があるのかなと思っていました」

道子は、岸田には会社は順調だと言ってるらしい。
岸田は辺見の言うなりに、全てを話してしまった。
頭を下げ下げ、くれぐれもお願ひしますの一点張りである。
辺見はポケットのテーブルレコーダーのスイッチを切り、席を立った。

6

夕方、辺見は事務所に戻った。

「道子は今年中に智子のことを何とかするつもりだ」

辺見が岸田との会話を大野に言った。

「岸田は本気だったんですかね？」

「いや、ただの遊びだったと思う。ただ道子の思い入れがあまりに激しいので、本人としては戸惑っている感じだった。道子にたとえ大金が入ったとしても、岸田は一緒に行くかどうか分からない。成り行きでここまで来たという感じだ」

辺見は岸田のオドオドした顔を思い出して喋った。

「道子は夫の勝太郎にあいそをつかし、若い岸田を手玉に取り、二人で別天地へ行ってやり直そうと考えているわけだ。その資金として、姉の智子の三千万円を取ろうとしている。その手先として、ぐうたら息子の勝治を使っているのだ」

「ということは、夫の勝太郎は知らないということですね」

「岸田との仲が分かった以上、勝太郎は関係ないとした方がいいだろう」

「道子は岸田に最後の賭けをしたのですね」

大野は佐伯美子の顔を見た。

「いや、違うわ」

と言って、キーを操作していた佐伯美子が立って二人の側にやって来た。

「市村道子は、夫の勝太郎にあいそをつかしてスポーツジムの岸田

に委ねたのは事実かも知れないですが、道子は当座の寂しさを紛らわすために岸田を誘っているものであって、いつまでも一緒に居る相手ではないと分かっているはずよ。相手は若い男で、道子としては岸田がいつまでも自分に向いていて呉れるとは思ってないと思うの。そのテープを聞くと岸田の戸惑いは言葉だけでも分かるわ。これが顔を見ていれば尚更、道子とすれば分かるはずよ。そんな人を恋の逃避行に選ぶ女なんていないわ」

美子が冷たい顔でさらりと言った。

「だから最後の賭けじゃなくて、ただの道連れと思ってるだけだと思っわ」

「なるほど。女の勘というやつだな」

辺見が頷いた。

「道子はしたたかな女ですからね。それくらいのことは考えてますね」

大野が頷きながら言った。

美子はニコツとして自分の席へ戻った。

「佐伯君の言うことはもつともかも知れないな。道子の人間性から言くと、岸田なんて丸つきり手のひらに乗ってるようなもんだ。逆に岸田の方も当座の恋人としてだけで、後から捨てられるんじゃないかと思ってるかも知れん。あの顔色からは、それも考えられる」

「たぬきときつねですね」

「かも知れん」

辺見が苦笑いした。

「明日のクリスマスに道子と岸田は会うに決まってる。最終確認のためにだ。そして、道子はその前か後に必ず犯行をするだろう」

「勝治を使つてですね」

「いや、自分でやるかも知れない。妹として、隙を見せておいて犯行に及ぶ。何故かと言うと、勝治の回りには刑事らしい男がうるちよろしているのを知ってるわけだから、目を勝治に向けさせておいて、その隙に自分でやってしまう」

「うーん、そうなると勝治はだしに使われるわけですね」

「そうなるのじゃないかな」

辺見は自分なりに推理を組み立てた。

そこへ智子から連絡が来た。辺見は背広の内ポケットから携帯電話を出した。智子が外出する時や来訪者が来た時など、何らかの変わったことがあった時は、必ず辺見の携帯電話に連絡することになっている。

「辺見です」

「吉野です。明日クリスマスパーティーをするので来ないかと道子に誘われました」

智子が不安そうに言った。

「家にですか？」

「ええ」

「それで、何と言ったのですか？」

「今年はやりたくないって言ったのですが、こんな時だからこそパーティーとやりましょうと言うので……、断る理由が他にみつからなかったので行くことを言いました」

「そうですか。いつもやってるのですか？」

「ええ。毎年クリスマスはどちらかの家で、両方の家族が揃ってやるのが習わしなんです。でも今年は夫がいないので断ろうとしたのですが……」

智子は、しかたがないと付け加えた。

「分かりました。それでは道子さんに電話をして、実は友達との約束を忘れてしまったと言って、友達も一緒に行ってもいいか聞いて下さい」

辺見が佐伯美子の顔を見た。美子は辺見に微笑みを返した。

「だれと行くのですか？」

智子が聞いて来た。

「うちの事務員が一緒に行きます。何の心配もいりません。有能な上、美人です。歳は若いので、ご主人のいこと紹介して下さい」

「分かりましたわ。すぐ連絡してみます」

と言って智子の電話は切れた。

「さあ、佐伯君の出番だ」

「はい。任せておいて下さい」

美子は頼もしい言葉を言った。

辺見は佐伯美子について何の心配もしていない。大野同様、全てを任せておけば確実にこなしてくれるのである。

「道子が智子を自宅に呼ぶということは、殺害が目的だろう。それであれば夫の勝太郎はいないな」

辺見が言った。

「そこへ私が行って、どう出るでしょうね」

美子が知的な顔をして言った。

「二人を殺すかも」

大野が美子に、人差し指でピストルを撃つまねをした。

「ピストル？ クリスマスなんだから、シャンペンに毒を入れて殺してほしいわ」

美子がロマンチックに言った。

「佐伯君らしいね」

辺見が美子を見て笑った。

そこに、再び智子から連絡があり、明日のパーティには友達も一緒にいいという返事だった。

「よし。イブの夜に散れだ！」

辺見が美子の顔を見た。

「道子は一人とは限らない。相棒がいる可能性があるんで、大野君を車の中で待機させておくから、マイクを持って非常の時はすぐに呼ぶんだ」

「はい。分かりました」

美子が緊張した顔をした。

十二月二十四日。街は全てがクリスマス一色である。

辺見は道子の夫、勝太郎を追った。勝太郎の会社は今日がシメで、仕事は昼で終わり仲間と共に近くの雀荘へ入って行った。

辺見はそれを確かめ、岸田のスポーツジムへ行った。受付に見覚えのある女の子が座っていた。

辺見は軽く会釈をして聞いた。

「岸田先生は今日見えていますか？」

「はい、おります。確か、前にパンフレットをお持ちになった方ですね」

受付嬢はニコツとして、さわやかに尋ねた。

「ええ、そうです」

辺見もニコツとした。

「ただ今レッスン中ですので、呼びすることはできませんが、お言付けなら……」

受付嬢がさわやかな笑顔で辺見に言った。

「いや、結構です。次の休み時間は何時ですか？」

「一時半です」

「ありがとうございます。その時分に電話しますので」

辺見はまたしても後ろ髪を引かれる思いでスポーツジムを後にした。

一方、大野はユミに電話して勝治の所在を聞いた。今日はクリスマスなのでママの手伝いをさせられており、スナックの方にいるらしい。ユミも直に行くと言う。

「それならいいけど。今夜どこかへ行くようなことがあれば、すぐに連絡くれないか」

「ええ、構わないけど」

ユミが不安げに言った。

「何も心配はいらないよ。何かあれば私が守ってあげるから」

と言って、大野は携帯電話の番号を教えた。ユミは素直に分かり

ましたと答えた。

大野は道子を尾行しながら喋っている。道子はデパートで買い物をして、家に戻る途中である。

「もしもし」

「。。。スポーツジムです」

受付嬢のさわやかな声が聞こえた。

「先程は失礼しました。岸田先生をお願いしたいのですが……」

「はい。お名前は？」

「浅川と言います」

「少々お待ち下さい」

あくまでもさわやかな言葉遣いである。

「もしもし」

少々間があいて、岸田が小さな声で言った。

「浅川です」

「何の用ですか？」

岸田は受話器を手で覆い、回りの人に聞こえないように喋った。

「今日はクリスマスだが、彼女から誘いの電話はないですか？」

「ありません」

「そうですか。でもこれからあるかも知れません。もしありましたら、今日は素直に従って下さい」

「えっ！ どうしてですか？ 何かあるのですか？」

岸田が不安げに聞いて来た。

「いや、別に何もありませんが、今日はクリスマスですから。彼女は会いたいんじゃないですか？ それに市村さんは今日居ませんので心配はいりませんよ」

「どこかへ？」

岸田は他に彼女が居るわけでもなく、今日のクリスマスを道子と過ごしたいと前々から思っていたので、誘いがなくても自分の方から誘うつもりでいた。

ところが辺見から例の写真を見せられて、もう終わりにしようと

考えていたが、道子の肉体を思い出すと居ても立つても居られないのである。

「市村さんは今夜、私と飲み明かすことになっている。だから今夜は大いに彼女を喜ばせてやってほしい。そうでもしてやらなければ彼女が可哀想だ」

辺見は、岸田の気持ちを計って喋った。

「分かりました。浅川さん、今夜はずっと市村さんと一緒に居て下さいよ。お願いします」

岸田の声が、受話器の向こうで弾んでいた。

「大丈夫です。大事な集まりですから心配はいりません」

辺見が駄目押しした。

（これで岸田は道子と会うだろう）

今年中には何とかしたいと思っている道子にとっては、今日のこのクリスマスは絶好の機会なのである。

辺見が大野に連絡した。

「現状は？」

「市村邸の前です。道子はデパートで買い物を済ませ、どこにも寄らず家に帰りました」

大野の車は市村邸の見える所に停まっている。

「勝治の方は？」

「今のところ、ユミから連絡がないのでスナックに居るものと思われます」

「そうか。その内そこに岸田が行くはずだ。行ったら連絡をくれ」

（道子は家に居る。御馳走を作ってるに違いない。そして、その中に毒を入れているのかも知れない）

辺見は道子のその様子を思い描き、身震いした。そして、ユミの居るスナックへ向かった。

ピンポン。

智子が市村邸のインターホンを押した。

しばらくして応答があり、道子が派手な格好をして玄関の戸を開けた。

「さあ、入って」

道子にはこやかに二人を招き入れた。

智子と美子は言われるがまま、かなり広いリビングルームに通された。

「道子、こちら吉野のいところで佐伯さんと言うの」

智子が美子を紹介した。

「始めまして、佐伯美子と言います。どうぞよろしく」

美子が上品にお辞儀をした。

「まあ、美しい方。妹の道子です」

道子がペコリと頭を下げた。

テーブルの上には沢山の御馳走が並べてあり、シャンペンも何本か置いてあった。

「後はだれが来るの？」

智子が聞いた。

「息子が来るかも知れないけど、分からないわ」

「市村さんは？」

「私とやってもつまらないので、どこかでやるからと言ってたから来ないと思うわ」

道子が冷たく言った。

「そう。美子さんが来なかったら二人きりだったのね」

「そうね。来てくれて良かったわ」

道子はシャンペンを開け、智子と美子のグラスに注ぎ、自分のにも注いだ。

カンパニー。

道子が飲むのを確認して、智子と美子が飲んだ。常に用心深く相手の挙動を見ていなければと、智子は必死だった。智子は美子の動

作を真似してればいいのだが、慣れていないので不安が広がっている。

「さあ、遠慮なく召し上がって」

道子がテーブルに並べられた御馳走を二人に勧めた。

美子は鳥のモモを手に取り、細工がしてあるか瞬間的に五感を働かせ、形の良い口元に持つて来て上品に食べた。智子も同じように鳥のモモを手に取り、美子を見ながら恐る恐る食べてみた。

「いつもは両方の家族でワイワイやりながら過ごすごですが、今年は良くないことばかりで、この有り様なんです」

道子が寂しそうに美子を見て言った。

「寂しいですね。おじさんには可愛がつて貰っていたのですが・・・」

美子がつともらしく言った。

「ところで市村さんの仕事はどう？」

智子がさりげなく聞いた。

「え、ええ。あまりかんばしくはないわ」

道子は、ほほを少し引きつらせて言った。

「この不景気では、家など買う気になれないですものね」

美子が優しい眼差しで、道子を見て言った。心の中では厳しく道子を睨んでいる。

「ええ」

道子は言葉少なに言った。

三人の会話は何だかぎこちなく、互いに探りを入れながら喋っていた。

家の外では大野が見張っている。辺りは静かな住宅街である。

一方、辺見は勝治の居るスナックへ行った。店の中はクリスマス一色であった。入口の所には見上げるようなクリスマスツリーが飾ってあり、シンゲルベルが大きく鳴っていた。既に何人かの客が居て、奇声を上げている。

辺見はカウンターに座りビールを注文した。カウンターの隅には、

勝治とユミがピタツとくつついて何やら話し込んでいる。

「いらつしゃい」

辺見の隣にママが座った。

「初めてですね。待ち合わせですか？」

ママが不審な顔をして聞いて来た。

クリスマスの夜に、一人で初めてのスナックに来ることは待ち合わせか特別の用がなければ中々来るものじゃない。ママが不審な顔をするのも納得ができる。

「いや、ちよつと用があつて来たのだが……」

辺見は回りを見て、

「マリちゃんが居ないみたいだが……」

と言つて、ママの顔を見た。

「マリちゃんに用なの？」

「ちよつと会いたいのだが」

「マリちゃんはまだもうじき来るけど、何の用？」

ママが辺見をジロリとなめるように見た。

「マリちゃんの母親から頼まれ事があつてね」

辺見は母親からの使いに化けた。

実際、辺見は昨日の晩マリの母親に会いに行っている。マリが勝治のことを詳しそつだったので何かあるとみて、マリの実家を訪ねたのである。そして、意外な事実を聞かされた。

マリの母親は、マリがお腹に入っている時、堕ろすことを拒んだためにその相手から捨てられ、女手一つでマリを育て上げたのである。マリは必死に働いている母親を見ながら貧乏に耐え、何とか中学を卒業すると房総の千倉から住み込みでこの新宿にやつて来た。

昼間は紡績工場で働き、夜はスナックで働くといったハードな日々を過ごしていた。なぜ新宿へ来てここまで働くかというと、マリが中学を卒業した日に母親から父親のことを聞かされたからである。新宿に居るかも知れない。母親の言葉にマリはどうしても会いたくて、住み込みで紡績工場の仕事を選んだのである。そして、新宿

のスナックで働いていれば、遊び人である父親に会えるのじゃないかと転々とし、ようやくこのスナックで父親の存在を知ることができたのである。

父親の名前は吉野順一と言い、智子の夫であった。吉野順一は、智子の妹の子である勝治が勤めるスナックに、時々飲みに来ていた。マリは父親と知って、進んで近づいて行ったのである。

「千倉の？」

ママがびつくりした顔をした。

「弟さん？」

「いや、単なる友人です」

辺見は変に勘ぐられなくなかった。

「マリちゃんのお母さんに何か？」

「いや、何もありません」

「お母さんに頼まれて連れに来たわけじゃ？」

ママが心配事を口にした。

「いや、マリちゃん自身のことですから、そんな心配はしないで下さい」

辺見は柔らかく言った。

ママは、連れ戻しに来たのかと思って心配したが、そうじゃないと分かってホッとしている。何せマリは店の看板娘なのである。

ママは安心したのか水割りをぐいっと飲み、

「もう来る頃だから、ゆつくりして行つてね」

と言い、他の席へ移った。

その時、辺見の携帯電話が鳴った。

「大変です！」

大野からだ。

「どうした！」

「智子の家が火事です」

「何！」

「たった今、消防無線が入りました」

大野の車には緊急無線が傍受できるようになっている。
「分かった。君はそこに居てくれたまえ。佐伯君が中に居るんだから」

辺見はスナックを出て、智子の家に急いだ。

9

消防車が何台も来ており、智子の家に放水していた。辺りは焦げた匂いが充満しており、やじ馬でこった返していた。

辺見は見覚えのある刑事を掴まえて、

「早いですね」

と、刑事の背後から声を掛けた。

「やあ、辺見さん」

「事件のようですね」

辺見がかまを掛けた。

「まだ分らないですけど。通報があったものですから」

若い刑事はそう言うつと、そそくさと辺見の前から姿を消した。

（放火だな）

辺見が呟いた。

そこに、大野から連絡があった。

「今、岸田が来て家の中に入りました」

「そうか。しっかり見張っててくれ」

（いよいよおいでなさったな）

辺見はスナックに電話した。

「先ほど伺った者だけど」

「ああ、千倉から来た……」

ママはすぐに分かった。

「マリちゃんは来ましたか？」

「いや、まだ来ないのよ。一番忙しい日なのに」

ママは苛立っていた。電話口の後ろでは、ワイワイ騒いでいる声

が聞こえた。

辺見は電話を切り、警視庁の松山警部に連絡した。松山とは元同僚で、二人は常に一、二の実績を上げていた。その松山に事の詳細を話し、辺見はスナックへ戻った。

扉を開けると、相変わらず賑やかだった。

「あーら、まだ来ないのよ」

ママが目をとろんとして辺見のそばに来た。辺見はマリのことも、勝治のことが気になった。勝治は先程と同じくカウンターの隅でグラスを傾けている。ユミは店が混んで来たので、他の客の応対に忙しそうである。

辺見はビールを飲む振りをして、勝治の様子をチラチラと見た。

勝治は腕時計を時々見ている。

（何かあるな）

辺見は勘を働かせて、スナックを出た。そして離れた所に車を止め、勝治が出て来るのを待った。

「そっちの様子はとうだ？」

大野に連絡した。

「四人でお喋りしています」

佐伯美子のポケットの中の小型マイクから、取り留めのない話題が聞こえていた。

「そうか」

辺見が切ろうとした。

「ちよつと待って下さい」

大野が止めた。

「電話です。道子が出ました」

「内容は聞こえないか？」

「どこかへ行くみたいです」

「だれからか分からないか？」

「ちよつと待って下さい」

大野が耳を澄ました。

「息子の勝治からです」

大野が言った。

「勝治の居るスナックへ行くみたいです」

「そうか。分かった」

道子と智子と美子、それに岸田が勝治の居るスナックへ来る。スナックへ呼んで、一体勝治はどうするのだろうか。辺見は頭を捻った。その時、勝治がスナックから出て来た。酔っ払ってフラフラしている。店の横に停めてあった車に乗り、猛スピードで走って行った。

辺見はその後を尾けた。勝治は智子の家の方に向かっている。

（智子の家が火事だとは知らないで行くのか。それとも火事を知ってあわててすっ飛んで行くのか）

辺見は酔っ払い運転の勝治の車を追うのに一苦労した。猛スピードの上に目茶苦茶な運転である。智子の家になんか近づくと、道路はだんだんと混んで来て、ついには動かなくなってしまった。車とやじ馬で道路は溢れている。勝治は車を降り、やじ馬をかき分け走りだした。鎮火しかけている智子家の前に立ち、中に入ろうとしたが警官に止められた。

「おばの家なんです！」

勝治が怒鳴ったが、中に入れて貰えず警官に食ってかかった。

辺見は遠くでその様子を見ていた。

智子が中に居るのじゃないかと、心配の表情が勝治の顔に滲み出ている。智子は道子と一緒にだということを知らないらしい。

（じゃなぜ道子を誘ったんだ？）

辺見が大野に連絡した。

「四人は？」

「今、スナックへ向かいました」

「智子は自分の家が火事だっということとは知らないのだな」

「ええ、まだです」

「勝治は今智子家の前に居る」

「そっちに行つたのですか」
「ああ、何があつて行つたのか分かんが」
辺見は勝治の行動が分からなかった。

10

道子、智子、美子それに岸田の四人が、スナックに入つて行つた。それを見届けた大野は車の中で待機した。

一方、辺見はスナックと違う方向に車を走らせている勝治の後を追っている。その車中に松山警部から連絡があつた。

「たつた今、マリこと神田まり子を逮捕した。情報をありがとう」
「どこに居た？」

辺見が聞いた。

「東京駅だ」

松山がポツリと言つた。

「やっぱり」

辺見の推理は当たつた。マリは智子の家に火を点け、千倉の母親の所へ行こうとしたに違いない。これで勝治の行動も読めた。

「そつちはどうだ？」

松山が逆に聞いて来た。

「勝治も東京駅へ向かつてる」

「分かつた。木村君が居るから」

松山は部下の木村に任せてあるからと言って、電話を切つた。

（木村君が待つてくれるのか。それなら安心だ）

辺見が大野に連絡した。

「そつちの様子はどうか？」

「勝治が居ないので道子はイライラしています」

「予定外だつたのかな」

「そうだと思います。自分で呼んでおいて居ないのでから、道子とすればどうしたらいいのか分からないのじゃないですか」

大野がスナックの中の様子を伝えた。

「そうだな。智子の金を狙ってる道子とすれば、勝治は必要な人間だからな。しかも今夜が絶好の機会のはずだ」

「と、思うのですが」

辺見が一拍おいて言った。

「ところが、勝治は今東京駅に向かっているとところだ」

「えっ！ 東京駅ですか？」

大野は方向違いなのでびっくりした。

「マリと待ち合わせじゃないかな」

「マリって？ スナックのマリちゃんですか？」

大野はまさかと思った。

「その通り。ところで、ユミはそこに居るかね？」

「ええ、ずっと居ます」

大野の頭の中は混乱して来た。辺見は大野の気持を察したのか、

「真相は後のお楽しみだ。とにかくそのまま監視を頼む」

と言って、辺見がニヤツと笑った。

勝治は東京駅で車を降り、辺見はその後を追った。そして、その先に木村刑事の顔があった。回りにも見覚えのある刑事が何人が張り込んでいた。

辺見が木村刑事に目配せした。

（もうちよつと待っててくれ）

木村が頷いた。

勝治は構内をうろちよろし、辺りを見回している。

（マリを探しているに違いない）

辺見は柱の陰から見ていた。

勝治は時計を見て、公衆電話の方に歩いた。辺見は距離を縮め、一つおいた公衆電話に向い、受話器を取って掛ける振りをした。

「もしもし、俺だ」

勝治が喋っている。辺見は左手で公衆電話の受話器を耳にあてがい、横を向き、右手で携帯電話の番号を押した。

「大野です」

「私だ。今勝治がスナックに電話してると思うが、どうだ、聞こえるか？」

「はい、ママが出てる感じです。何やら怒っています」

「そうか、良く聞いていてくれ」

辺見は携帯電話はそのままにして、一つおいた勝治の声に全神経を集中した。

「マリは？　そこに居ないか？」

勝治はしきりにマリのことを聞いている。マリが居ないので焦ってる様子がありありとわかる。その内、何かウンウンと頷いて電話を切った。そして、また受話器を取りボタンを押した。

（マリのアパートに電話してるのだろう）

勝治はイライラしながら受話器を左手に持ち、右手でしきりにタバコをふかしている。だれも出ない電話にイライラが今にも爆発しそうである。辺見はそんな様子をすぐ目の前で見ている。

ガチャン！

勝治が受話器を叩きつけるように置いた。その音が合図かのように、木村刑事と他二名の刑事が勝治を囲んだ。

勝治はすぐに状況を把握したのか、何の抵抗もせずに下を向いてうな垂れてしまった。

11

ルルルル。

「先生」

大野から連絡が来た。

「勝治の電話はママから母親の道子に代わって、何やら怒鳴っていました。そして、今はママと道子が隅の方に行ってヒソヒソと話をしているところです。佐伯君がそっと知らせて来ました」

「そうか。こっちは勝治を今逮捕したところだ」

「じゃ、こつちにも直来ますね」

「ああ。逃げ出さないように見張っててくれ」

「分かりました」

と、大野が言うなり、三台の車がスーッとスナックを囲むように停まった。そしてスナックの裏口に二人回り、四人の刑事が玄関から入って行った。

ガシャン、ガシヤガシャン。

中のざわめきが聞こえた。道子は咄嗟に刑事と分かり裏口に逃げようとしたが、美子が手を取りその場にねじ伏せた。智子はただブルブルと震えて見ている。スナックのママと岸田は啞然と美子を見ていた。

刑事は道子に手錠を掛け、ママと岸田は重要参考人ということで連行して行った。

大勢の客は一瞬映画のワンシーンを見ているかのように、ただ啞然と見ているだけでだれも騒ぎを起こす者はいなかった。

そこへ大野が駆け寄り、

「皆さん、大変お騒がせしました。続きを存分に楽しんで下さい」

と言つて、美子と智子連れて店を出た。

「やれやれ大変でしたね」

大野が智子に声を掛けた。

「ええ、びっくりしたわ。目の前でこんなことになるなんて」

智子はまだ興奮が醒めやらないでいる。

「美子さんがまた凄かったわ。道子をあつという間にねじ伏せてしまつて、驚いたわ」

「あら、はしたなかつたわね」

美子が上品にホホホと笑った。

智子は美子のアンバランスさに頬が少し緩んだ。緊張の糸が少しずつ和らいで来た。しかし、智子は自分の家が焼け落ちていることも、自分の夫の過去にマリという娘が居て、その娘の復讐で今回の事件、いや、夫の交通事故までも企てられた事とは全く知らない。

いずれ全てを知るだろうけど、今日のところは大野も美子も黙っていたように思った。

「ところで、イブにマリが動くことを先生はどうして知ったのかしら？」

美子が疑問に思っていたことを大野に聞いた。

「先生に聞いてみたら」

大野が携帯電話を美子に渡した。

「先生」

「おー、佐伯君か。無事でなによりだ」

辺見の優しい声が聞こえた。

「はい。こちらは全部終わりました」

「そうか。ご苦労だった」

辺見は一安心した。

「ところで先生、一つ聞きたいことがあるんですけど」

「ん？ 何かな」

「マリが今日動くと、どうして分かったのですか？」

「マリの動きか？」

「ええ」

「それは勘だよ。探偵の勘というやつだよ」

辺見は自慢げに言った。

「そうですか？」

美子が疑いの言葉を掛けた。

「疑ってるんだな……。それなら種証しとするか」

辺見は、美子には嘘は付けないと思った。

「実はだな……」

「はい」

「マリの誕生日は十二月二十四日なんだよ」

「今日？」

「そう。そして……。マリの母親も同じく十二月二十四日なんだ」

「それで？」

「そう。その後は・・・勘さ」

ハハハと辺見が笑った。

美子も大きく頷いて、そーなんだと、上品な顔立ちとは別に大きな声で笑った。

その声は、イブの街に響き渡っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9489i/>

辺見作二郎探偵事件簿 1

2010年10月25日09時32分発行